

あいさつ

一昨年度から引き続き文部科学省の「学校卒業後における障害者の学びの支援に関する実践研究事業」の受託させていただき、今年度で3年目を迎えることが出来ました。

特定非営利活動法人エス・アイ・エヌ「集いの場あゆみ」における取組が、文部科学省による「障害者の多様な学習活動を総合的に支援するための実践研究」事業を通して、多くの方々から知っていただく機会になったことを大変、感謝しております。そして実践を振り返り、成果と課題に向き合う機会をいただいたことも大変嬉しく思います。

この3年間の実践研究は、当初、目指していた取組の予想をはるかに超える成果と進展を感じました。それは、委託事業による実践研究に取り組む中で、背中を押してもらったことも大きかったのではないかと思います。

改めて事業を3年続けて受託できたことに深く感謝しております。

今回の実践報告では、自立を学びあう生涯学習の取組に参加する利用者の様子を視覚化して実践の経過を報告します。これまでテキスト作成のプログラム化が中心であったために、当事者の姿や実践場面などが見えにくい一面があったと反省しております。そのため、今回は今年度も含めた「3年間の成果発表」として御報告をいたします。

実践の中でも紹介をしている『あゆみレター』の編集長の松風天耕さん（ペンネーム）が作成した2年間のあゆみレター（あゆみ広報誌）からベスト10選も読んでいただけると、より活動の様子を理解していただけるのではないかと考えております。あゆみの利用者でもある松風さんが取材、原稿作成、編集、パソコンでの作成までを行っています。

そして、上述した実践報告以外にも、あゆみの利用者の手記もまとめました。

手記では人生を振り返り、就労や生活の中での生きがいと生きづらさ、そして、あゆみを利用する理由（わけ）や、あゆみへの期待や希望について手記や聞き取りにより編集しました。この取組から今後のあゆみの活動や支援の意味を考えます。

また、あゆみの活動をダイジェストで編集した動画も作成し、土日の講座・行事、平日の活動、コロナ禍での活動などの紹介DVDの制作もしました。

上述した3つの成果物をセットにして見ていただくと幸いです。

最後になりましたが、委託事業の3年間を通して集いの場あゆみの活動に参加していただいた講師、ボランティア、利用者の皆様及び、実践報告に関わる編集や執筆に協力していただいた皆様に心からの感謝を申し上げます。

今後とも引き続き御支援・御協力をお願い申し上げます。

特定非営利活動法人エス・アイ・エヌ
集いの場あゆみ 所長 草羽 俊之

人生を豊かに生きるための生涯学習をめざして

1. 障害者の生涯学習支援の3年間の取組

(1) 利用者の実態と活動内容の推移

集いの場あゆみ（以下あゆみとする）では2018年度から始まった文部科学省の「障害者の多様な学習活動を総合的に支援するための実践研究」の事業を受託してから3年間取り組んできました。

あゆみは知的障害や発達障害、精神障害のある人が利用しています。原則、働きながら活動に参加する人が利用する場としてスタートしましたが、現在は、あゆみの活動内容が主たる社会参加の場として利用する人もいます。

あゆみでの活動形態は大きく2つになります。

まず「土・日の活動」は、「学びの講座」「文化的な講座」「行事」の3つの活動を柱にして取り組んでいます。

次に「平日の活動」は、利用者の希望に沿った活動を中心に、調理（わが家食堂）、クラブ活動、個別の活動、外出等を行っています。

土・日の講座や活動では、事業受託した1年目は「安全・安心な生活」（健康生活、食生活、消費者生活）を送るために必要な知識やスキルを学び、自立生活に役立てる講座に取り組みました。2年目は「自立と支援」（就労支援、相談支援、自分マップ作り）に関する学びを通して、障害福祉サービスの活用や支援機関の利用についての講座に取り組みました。

また、文化的な講座では当初、音楽・表現、ヨガ、紙芝居が主な活動でしたが2年目からはダンス、3年目からはレク・スポーツの講座が始まりました。

これまで土・日曜日に参加する利用者には、文化的な講座や行事の取組として様々な講座を開催しましたが、平日にも、これまでの取組を継承・発展させて、少人数で趣味や特技を広げるクラブ活動（アート部、あゆみ音楽部、レクスポーツ部）をスタートしました。

3年目となる2020年度は、新型コロナウイルスの感染拡大への対策と支援の幕開けとなりました。過去に経験のない非日常での生活の中で、先が見えない中実践を進める不安もありました。しかし、ラインアプリを活用した通信手段で様々な取組にチャレンジをすることができました。これまでと違ったコミュニケーション手段での交流では、新しい発見や可能性を見つけることもできました。人と人をつないで、互いに思いを交流する新しい関係性を構築する機会となりました。

(2) 現在の実践の到達点

「集いの場あゆみ」の生涯学習の取組は、学校卒業後に就労している人が、自立のために必要な知識やスキルの習得に向けた生涯学習として始まりました。

就労や生活の中での困り事の解決や生きがいを作るための学びは、自らの暮らしの中に役立てたり、生活に潤いを感じたりする文化活動等も生涯学習として捉えることが重要になります。つまり、生涯学習は人生を豊かに生きるための支援だとも言えます。また、自立に役立つ実践的な学習や生きる喜びにつながる活動をさらに充実するには、共に楽しむ仲間が必要であるとも考えます。

就労や生活の中で直面する問題に対して学んだことを活かすときは、個に応じた支援が必要になります。そして、障害者福祉サービスなどの利用や支援機関や団体との連携も大切となります。学びの延長上にはそういった協力や連携が欠かせません。つまり、切れ目を作らず、垣根を作らず、その人の人生を支援する一角として生涯学習の場が果たしていく役割があります。

このように、障害者の生涯学習支援が様々な機関や団体とのつながり、多くの人々となつなぐることが、地域の中で共に生き、活動できる地域社会の実現になると思います。そして、その人の人生を支える土台になります。

私は生涯学習支援の取組を重ねると共に、人は歳を重ねながら「生きる」ために学びがあると考えるようになりました。つまり、生きること全てが学びであると言っても過言ではありません。学びに求められる裾野の広さや深さは限りなくあります。しかし気負うことなく、楽しみながら続いていけるように、学びと寄り添いながら支援を続けることが大切だと思います。つまり、「学びは続くよどこまでも、、、」ということになります。

2. 生涯学習支援の3年間の実践のまとめ

今回の報告では大きく2つの柱で構成をしております。一つ目は3年間の実践の成果と今後の期待を最初に報告します。そして、二つ目はその内容に沿って実践の様子が視覚的にも分かりやすくするために取組場面の画像を交えながら実践が進んでいく様子を紹介します。

最初にあゆみの実践報告は3つの活動からまとめました。あゆみの取組は主に3つの活動で構成されています。①就労や生活に役立つ学び。②仲間と共に楽しみを感じる行事。③豊かな文化活動で生きがいづくり。の3つです。

そして、この3つの活動に参加する利用者は、就労をされていて休日に利用する人、加齢や障害の進行により仕事をリタイアした人が第二の人生の生きがいづくりのために参加する利用者、失業中であったり、通常の社会参加や日中活動への参加が難しかったりする利用者です。

このように、あゆみ発足時の就労する障害者の生涯学習支援の場から、利用者の実態が変化する中で利用目的も多様になってきました。

その中で、あゆみの実践も多様なニーズに応えるための実践へと変化してきました。

(1) 自立に役立つ学びの講座

学びの講座は生活をしていく上で、基本となる「健康」や「食」に関する生活

に役立つ講座を基調にして継続的に学んでいます。就労や生活を支える支援の活用や金銭管理の方法については、支援を活用しながら自立していくための学びや自分で生活を築くための家計管理について学びました。

健康や食の講座は、毎年3回シリーズを継続して行っています。反復することで身に付けた人や他の学びの講座と関連させて生活の中に取り入れた人もいます。

学びの活かし方や実践例を紹介します。(概要を本人の言葉も交えて記述)

①健康講座の学びを活かした実践例

○職場での心のストレスチェック診断の結果が気になりました。あゆみの職員さんに表の見方や分析内容について詳しくおしえてもらい、就労支援者(なかぼつ) Yさんと一緒に自分の健康状態を知るために会社の健康相談室に行って健康状態を聞いて少し安心しました。

○ちょっと太り始めたので、健康講座で聞いたウォーキングを始めました。通勤途中のバス停を2~3つ早めに降りて歩くといいよと言われたので、歩いて移動し始めてから体重が減って締まった体付きになり、友達にも羨ましがられています。通勤の中でできたのでよかったです。

○健康手帳は通院の時に必ず持っていき役立てています。健康講座の時に計測した体重、身長、血圧などの健康記録をもって病院にいきました。お医者さんの方から話してくれました。話すことが苦手だったので、上手く伝えられないかなと思ったけど、健康講座で作った健康手帳が話すきっかけになりました。色々とお医者さんが質問してくれて話ができました。実はコロナが流行っているときに熱が出て、丁寧に見てくれる病院をあゆみで紹介してもらい、そこに健康手帳をもって行ったら、平熱が分かりやすくていい手帳だねと褒められました。結局、熱も下がり安心しました。

②食の講座の学びを活かした実践例

○プラスワンは、食の講座の渡部先生が野菜不足を補うためにサラダや野菜ジュースでも加えることを勧めてくれた学びです。昼食の弁当に一人用サラダを加えたりバランスを考えた弁当選びをしたりする人が増えています。合言葉はプラスワン! です。

○調理実習で作った袋調理を家で作ったり、会社に持っていく弁当を自分で作ったりする人もいます。コンビニで野菜たっぷり味噌汁をプラスワンして野菜を補っています。食の講座の時にマイ弁当を作ってきて渡部先生に褒められて、みんなにもマイ弁当を見せると「すごい」「おいしそう」と言われ、嬉しくなりました。、マイ弁当作りが続いています。これまで、コンビニ弁当を買っていたので家計にも大助かりで小遣いに余裕ができました。

③就労・生活・相談支援の講座の学びを活かした実践例

○職場での悩みや困り事を最初はあゆみで聞いてもらっていましたが、解決

するためには専門の就労支援機関に相談をした方がいいという事になり、地域の就業・生活相談支援センター（なかぼつ）に相談に行きました。就労の講座でもなかぼつさんのことを学んでいたため、期待してあゆみの職員さんと一緒に行きました。なかぼつの支援員さんの職場訪問を通して、仕事の様子を見てもらい「仕事量や内容の調整」「指示の内容を分かりやすく」「指示を出す人の確認」を職場での課題をはっきりと出してくれました。会社にもこれから伝えてくれるそうで気持ちが楽になりました。

〇一人暮らしを始めるにあたって生活に必要な支援（障害者福祉サービス）を受けるために相談支援員さんを紹介してもらいました。医療や福祉について細かくあゆみで教えてもらっていたので、自分にとって必要な支援の計画を相談支援員さんと立ててサービス計画の会議やモニタリングにもあゆみの職員さんに出てもらっているため、私が伝えられないことも代弁をしてくれて助かっています。

（２）実践例を通して分かったこと

講座での学びを生活や就労に活かすには、自分の生活との関連性が重要になります。学びを活かすときは、必ず個々の動機や目的意識が働いています。「もう少し小遣いがほしい。」「節約するために何をすればよいか。」「昼食は抜かすわけにはいかないし、体力仕事なので、しっかり昼食は食べたい。自分でご飯をたっぷり入れておかずもバランスよく入れる。朝の作るための時間の節約をするために前日の準備や簡単にできる冷凍食品も使って、野菜は一人用サラダなどで補う工夫をしています。食の講座で習った栄養バランスや簡単レシピなどを活用した調理法で作ったマイ弁当は 180 円～200 円くらいでできます。

コンビニ弁当でいろいろと買っていたら 700 円～800 円かかるので毎日 500 円以上の節約ができるので、時々美味しいものを食べに行ったり、おしゃれな服や靴も買ったりできます。経済生活と食生活を上手く連動させて学んだことを実践しています。

福祉サービスの利用も支援機関やサービスの内容を知るだけで留まってしまっただけでは自立生活には役立ちません。障害のある人にとってはそこから一步踏み出す時の心の準備や踏み出しを側で支えてくれる人が大切となります。

また、本人の生活にとって、どのような支援やサービスの種類が必要か想定しながらイメージを作らないと次に進むことができません。支援やサービスの種類を知識として知るところに留まらず、活用するための自分の生活像と一緒に考えていくことが大切となります。学びは生活や就労に活かしていかないと意味がないと思います。学びを活かした支援が大切だと実感する事例です。

（３）楽しい「生きがづくり」や「仲間との活動」

生活の中には、楽しみをもつことや生きがいをつくることも必要です。障害がある人が働くのは大変なことがたくさんあります。特にあゆみでは一般就労

をしている人も多く、スーパー、流通業、清掃業など様々な事業所で働いています。障害者雇用として入社した現場とはいえ、厳しい環境の中で働く人や理不尽な言葉も掛けられる人もいます。あゆみに来たときは、職場での辛い思いを話す人や忘れたい人まで様々です。あゆみでは、とにかく思いっきり自分らしく楽しみたいと思って来ています。厳しい労働環境の中で、楽しみな活動は労働と対極的な位置にあります。対極だからこそ楽しみがより一層際立ち、求められていると思います。その中で、働くばかりではなく、生きがいとしての楽しみをつくるための活動の意味を感じます。

①土・日曜日と平日の活動の特徴（違いとそれぞれの良さ）

○ 講座の拡大、クラブ活動の発足

土・日の活動では当初、音楽・表現活動から始まり、ヨガ、スポーツ、ダンスと利用者の要望に沿って活動を立ち上げてきました。一方、平日の利用者には少人数で出来るクラブ活動が始まりました。アート部から始まり、レクスポーツ部、現在ではあゆみ音楽部の活動も始まりました。

土・日曜日の活動と平日の活動とは、人数と志向の違う利用者の集まりとなっています。そのためにそれぞれの特徴を生かしつつ生きがいづくりにつながる活動や集団性を生かして楽しめる活動に取り組んでいます。

○ 行事や外出の活動（それぞれの違いと良さ）

平日と日曜日での仲間との活動は集団の大きさによって行事や活動の種類がやや異なっています。平日は小集団なので、あゆみ号（事業所の所有車）で移動可能な広いエリアの外出が可能です。また、その日に行先を決めても柔軟に遊びに行けます。ですが、日曜日は大集団のため行事計画を立てて、色々な準備をして行かなければいけません。そのため年度当初に希望を聞きながら季節感のある行事の1年間の計画を立てています。

このように日曜日に実施する行事は、平日の活動と内容や楽しみ方に違いはありますが、毎年、利用者自身が行事の企画に参加し、実施時には役割をもって参加できるように工夫をしながら進めています。

②平日の活動

～クラブ活動・外出（芸術、自然、体験）・遊ぶ～

○クラブ活動の実践（アート部、レクスポーツ部、あゆみ音楽部）

あゆみの活動が始まった当初、平日の活動では、近隣の区の体育館や運動公園などでスポーツを楽しんでいました。また、物作りが好きな仲間が集まり、アート制作が始まりました。最初は季節にちなんだ作品作りをしていくうちに、美術館で芸術鑑賞したときの色使いや作品の印象を参考にしたり、野外に行って自然に親しんだりした経験を題材にしたアート作品を仲間と制作するようになりました。いつのまにか『アート部』の誕生です。

自然の中で拾った小枝や落ち葉、友達が旅行のお土産で買ってきた菓子箱の包み紙など身近にあるものを活用して、知恵や工夫を出し合いながら制作

をしています。現在は、特別支援学校を退職されたIさん（美術教員）がボランティアで関わってくれています。Iさんは誉め上手で、一人一人への優しい言葉掛けで、それぞれの利用者の制作意欲や作品の良さを伝えてくれます。作品の出来上がりを引き立たす工夫もしてくれます。利用者みんなはIさんの助言や工夫で「作品が映えるね。」と言っています。

『レク・スポーツ部』も、当初は近隣の体育館に行ってミニテニスやバドミントン等をしたのが始まりです。今では、徒歩圏内の体育館、運動公園を有効に利用して、バドミントン、バスケット、ミニテニス、フットサル、卓球、屋外ではグランドゴルフ、野球ごっこなど様々なスポーツに挑戦しています。

自分がやりたいと思うスポーツに、技術や体力・年齢に関係なく、参加できるように工夫をして、多くの利用者の健康的な活動につながっています。

また、少人数であゆみの室内でもできるポッチャも最近では人気のスポーツになっています。特に、作戦会議と称して戦略を立ててグループ対決をするポッチャは他にない面白さがあります。また、『レク・スポーツ部』にも特別支援学校を退職された元教員のNさんが関わってくれています。NさんもIさん同様、誉め上手で、利用者の希望に沿った種目を選んで、利用者の体力や技量に合わせて無理なく体を動かせるように、スポーツの楽しさを引き出してくれます。

『あゆみ音楽クラブ』は今年度から始まったクラブ活動です。楽器が好きな利用者が集まる日にボランティアで、プロの音楽家のAさんがきてくれます。学校卒業後も「やってみたかった。」「続けたかった。」楽器（リコーダー、ウクレレ）を手にしてくる人、あゆみにあるキーボードやハンドベル、ツリーチャイム等、その日にやってみたい楽器や挑戦したい楽器を選ぶ人様々です。Aさんは譜面を簡単なコードに直してくれたり、楽器の扱い方の基本を丁寧に個々に支援してくれます。1時間のレッスンの中で一人一人の奏でる楽器の音が一つの楽曲に仕上がります。音楽部はいつも同じメンバーではないため、扱う楽器も曲目も違う一期一会の演奏会となります。1時間の練習で合奏ができるように作り上げてくれるので、動画をとって後で見る楽しみもあります。また時々、披露してくれるAさんの演奏に、みんなウットリの時間を過ごすことができます。

○外出（芸術、体験、遊ぶ、自然）を楽しむ

この3年間は外出をする機会も増え、美術館や様々なイベント、行楽地等の情報や体験型の施設や物作り体験などができる情報をiPadで探して外出の計画を立ててきました。また、安くて美味なパン屋や弁当屋を探したり、人気のランチ店も探したりするのもお手のものになりました。そして集めた情報を事前に友達と連絡をとって一緒に行く計画を立てるようになりました。

最近ではコロナの感染拡大の影響もあり、自然の中に癒しを求めて心身のリフレッシュをすることも多くなっています。心地よい環境の中でゆったりと友達との時を楽しむ時間が相互の関係性を深める機会になっています。

〇一人一人が輝く活動

あゆみの活動場所は2つの場があります。ビルの1階にある15人前後の利用者が学ぶことができる広いスペースのある部屋と同じビル内の4階の中で一般の住居(2DK)があります。

集いの場あゆみの開所当初から、4階の部屋を「わが家」と呼んで平日に参加する利用者の家庭のようなくつろぎの場であり、自由に自分を解放する居場所です。平日に参加する利用者はあゆみで出会った人が多く、年齢差もあったり、家庭環境も違ったりする小さな集団ですが、わが家は利用者がくつろぎ、ありのままの自分を出せる場所です。

わが家では、テレビを見たり、お喋りをしたり、物作りをしたり、それぞれが好きなことをします。このような日常の普通の営みが、集った仲間と楽しみ、つながりを広げ、深める場所になっていきます。そういった中で、親しい者同士が友達時間をつくったり、一人、物作りや読書をしたりして自分時間を楽しむ人もいます。一人時間を楽しんでいる様子が気になり、作っている物や読んでいる本に関心を寄せるきっかけになっています。

このように、一緒に活動をする中で、お互いの関係性を深めたり、距離感を近づけたりする中で「男3人組」「3人女子会」など、自然に親しい者同士のグループができていきます。

他にも楽しみなイベントがあります。例えば誕生会です。祝福を受ける人も祝う人も笑顔が輝きます。誕生日ハットを被った記念写真撮影も恒例の決めポーズのときは、年齢に関係なく嬉しさがこみ上げます。日常の小さな活動の中に喜びを感じ、つながる仲間と過ごす時間が豊かな人間関係を育むと考えます。

わが家の時間の過ごし方から友達付き合いへと発展することがあります。このようにわが家での活動は、人と人をつないだり興味や趣味を広げたりするきっかけ作りになっています。

新聞コラムから書写を続けていたMさんは、パソコンの技術を磨き、あゆみの活動を伝えるあゆみレターの作成に発展していきました。あゆみの仲間の思いや姿を思い出しながら、楽しそうに綴る活動は3年になります。

50歳を迎えたMさんは長年務めたパン屋を退職後に身体にも障害を受けることになり、第2の人生への自分探しの末、今はあゆみの編集長として多くの仲間の読者に毎月あゆみレターを届けています。利用者の声や思いを伝えるための取材や正確な言葉で表現するためにインターネット検索を駆使して作成します。パソコンに向かってあゆみレターを作成しているときや資料

を悩ましそうに見たり、原稿を考えながら思い出し笑いをしたりするときの表情は輝いて見えます。(資料にて掲載)

③土・日曜日の活動

～スポーツ・文化的な活動～

日曜日や土曜日には学びの講座以外に、スポーツや文化的な講座も行っています。当初、音楽を中心とした活動としてスタートしましたが、今は様々な活動が行われています。「音楽・表現」「ダンス」「レク・スポーツ」「ヨガ」「紙芝居」、またプロの音楽家による「ミニコンサート」も開催されています。

活動の内容が多様になっている理由は、経験の有無や、得意・不得意にも関係なく、全ての利用者に希望のある活動を保障して、選択できる機会をつくるのが目的でした。

利用者からは「やってみたいけど、できると思っていなかった。」「苦手だと思っていたけど、やってみると面白い。」の声が届きました。講師の指導方法や支援の上手さもさることながら、利用者がのびのびと楽しみながら行っているうちに自然と身に付けたり、個性的なアレンジをしたりした動きに驚きを感じることもあります。

利用者アンケートが次の活動内容や支援への反映につながっています。講師も利用者から学び、相互の学びあいが文化的な活動の基盤になってます。

新しい世界を経験することで、今まで気付かなかった自分と出会うことを感じる人は多いと思います。利用者の中には既存のプログラムの活動に参加をしてきた人もいますが、あゆみの利用者の多くは、これまで継続して集団で余暇的な活動(文化的活動等)に参加することが少なかった人たちです。

多様な講座や活動から、自分で選択したり、生活の中に取り入れたりして健康の維持や気分転換をはかる機会となっています。

④季節の行事(日曜日・祝日の活動)

～仲間と楽しむ活動～

日曜日に主に来る利用者は、学びの講座やスポーツ・文化的活動などの機会が充実している反面、行事などの集団的な活動が不十分でした。利用者から楽しい行事を希望する声も多く、3年前から月に1回程度行事の企画をしてきました。

そして、講座のアンケートや年度末に、次年度に向けて「やってみたい行事ランキング」を話し合うようになりました。季節に合わせた行事の企画を立てて、活動内容によっては、利用者自身が企画や計画段階から役割をもって参加をする方法も取り入れるようになりました。利用者からのアイデアを活かしたり、当日運営の役割を担ってもらったりすることも始めました。季節の行事は多くの参加者が期待をする活動です。日曜日にこだわらず、祝日にも開催することもあります。「お花見」「夏祭り」「ハロウィン仮装大会」「クリスマス会」「節分祭り」などは恒例行事になりました。イベント参加やハイ

キングなども企画されるときもあります。日帰り小旅行や小グループに分かれて行くことも新しい企画として始まる予定です。

このような行事は、学びや文化的な講座とは違い、ありのままの自分で楽しめる時間の過ごし方となっているように見えます。誰に気兼ねすることなく、自分らしく楽しむ活動として貴重な機会となっていると感じます。

(4) つながりを深め、広げる活動

①わが家のごはん作り

わが家でのつながりを深めた一番の活動は「わが家食堂」というごはん作りでした。わが家が始まった時から現在まで継続している活動の一つです。

一人暮らしやグループホームの生活、一人親家庭などの人の中には、作り立ての料理を人と一緒に食べる機会が少ない人がいます。また、人と人の関係を結ぶのに有効なのは、ごはんを一緒に作り食べることです。自分の得意料理を作ってふるまう利用者、仲間と協力して作る料理、レシピを事前に調べてきたり、当日 iPad でレシピを検索したりして作る料理など様々です。

しかし、どの料理も食べるときはわが家のような団らんの中で食べることができるのが特徴です。わが家は、このような家族的な雰囲気をつくることのできる場所です。子ども食堂のニーズの高まりと同時に、障害のある人にとっては、わが家のような大人食堂の場が必要ではないかと感じます。

②コロナ禍での活動

2020年は新型コロナウイルスの感染が拡大した年でもありました。4月に始まった緊急事態宣言により、様々な施設や場所での使用や集いの場あゆみでの活動も自粛を余儀なくされました。多くの利用者は、スーパーや流通業、介護施設や病院などの清掃で勤務している関係上、緊急事態宣言下でも休業が難しい業種でした。マスクの着用、手洗いやアルコール消毒の励行、三密を防ぐ行動用式などが日常の合言葉のように連呼する毎日でした。不要不急の外出もその一つで、余暇活動や文化的な活動も準えるように言われま

す。
コロナに関する情報はテレビの報道やインターネット、YouTube 等でも収集は可能な時代ですが、知的障害のある人にとって、感染を防ぐための正しい行動のとり方や必要な準備、緊急時の対応は、一人一人の生活様式や就労状況が様々なために、個々で必要な情報の選択をして活用するには困難なことも多いのが現状です。一人暮らしの人や家族の支援を受けにくい環境の人は、どうすればよいか困惑する人もいました

また、コロナ禍では多くの不安や心配、困り事も出てきました。「熱が出て下がらないけどどうしようか。」「病院に行ったけど風邪薬だけくれて診察もなかった。」「マスクが無くなって困っている。」「仕事が休みになってストレスが溜まって親と喧嘩ばかりしている。」「お金が底をつきそう。」「人と話せない（思いを聞いてもらえない）のが辛い。」「講座や活動が無くても、いい

からあゆみに行ってもいい?」「コロナを防ぐのにマスクや手洗いは自分のやり方でいいの?」等々、たくさんの困惑した声があゆみに届きました。

多くの利用者は、自宅に居続けることで話相手も限られ、必要以上に話すことを禁じられる中で、悩みの抱え込み、孤独の寂しさ、先の見えない心細さなど、精神的な不安定さがみられました。

あゆみでは、このような状況下で、「何が必要か?」「何をすべきか?」「何ができるか?」を考えました。そこで、在宅になっていても支援ができる方法として、ラインアプリを活用した情報発信や動画の提供による支援を考えました。以前から多くの利用者が使用するスマホなどのラインアプリを活用して、ライングループを作り、あゆみの講座や活動・行事の連絡や参加確認等に活用していました。

そのライングループを活用して支援をすることにしました。まだ、ライングループへ未加入の人にも、本人や家族とも丁寧に相談して確認をとりながら、ライングループの利用をお願いし、利用時のルールやマナーなどの徹底も図りながら進めました。あゆみの講座講師や支援者、ボランティアの皆さんにも協力してもらい、音楽、ヨガ、ダンス、また職員の得技や趣味の紹介動画を1日に2回の送信をしました。

そうすると、グループにたくさんの反応が返ってきました、色々な感動や喜びのコメントやスタンプでの交流が始まりました。「待ってました!」とばかりに、あっという間にグループ交流が始まり、つながりを求める声の渦が巻き起こりました。つながった!「ラインのトークで言葉のリレーになった。」「悩んでいる人のエールも届いた。」「講師やボランティアさんへの感謝の言葉もきた。」

また、ラインで交信できない人には、家でパソコンやテレビで見れるように動画のDVDを作成して送りました。ライン電話ではビデオ通話でも話しながら顔を見て健康状態の悩みや心配事の相談にものりました。

当初、抱え込んでいた心配事も徐々に解決して、利用者同士の絆も生まれたり、つながりも深まったりしました。そして、コロナ禍でのライントークや動画視聴を通しての、新しい関係性も生まれてきました。急場しのぎでしたが、ライントークや動画視聴による思わぬ成果も出ました。

しかし、新型コロナウイルスによる感染拡大は、これまで経験のない危機的状況と称される中で未だ終息に至っていません。

ライングループでの交流だけでは解決できるものではありませんが、まだまだ、コロナ禍が続くと想定し、解除後も継続して動画配信を続けています。

あゆみの活動動画を配信する中で、多くの利用者が、これまで交流のなかった利用者の様子や利用できない日の活動も知ることができるようになりました。すると、今まで以上にあゆみの活動に関心をもてるようになりました。

また、自分で動画を作成するための講座も行った結果、自作の動画を発信する人も出てきました。もちろん自作動画の制作方法や注意などは確認しながら取り組むと、受け身の楽しみから、主体的な楽しみ方へと変わってきました。

他にもあゆみでは、自然に飛び出す野外での活動を多く取り入れたり、野外ヨガや運動公園でのソーシャルディスタンスをとったスポーツ活動（グラウンドゴルフ、ミニテニス、卓球）も行いました。

様々な工夫や人数制限をしながら、一人一人の利用できる回数を減らして僅かでも集える機会をつくり、今も活動を続けています。

生涯学習や余暇活動は不要・不急のものとして言われる中で、このような時だからこそ求められることへ着目し、コロナ禍における役割があると思います。コロナ禍での環境は、人との関係を断ち、緊急時という名のもとに多くの楽しみと生きがいを奪って行ってます。更にこれまでも増して生きづらさを抱えることになった人たちにとって、生涯学習の場が支えの拠点の一つとして役立てるように、一人一人のニーズを受け止めながら、今後も様々な対処ができる知恵と方法を考え続けることが大切であると考えます。

③障害者の生涯学習支援を広げる

○平成30年11月10日、11日「超福祉の学校」への参加。

「共生社会」の実現に目指したフォーラムに参加。全国の色々な実践から学びました。また「WheelLog」を活用したバリアフリーマップの体験活動や東ちづるさん率いる「平成まぜこぜ一座」のパフォーマンスを見ました。

○令和元年10月6日

特定非営利活動法人エス・アイ・エヌ主催の

「障害者の生涯学習支援について」の講演会の開催

法人主催の初めての講演会を、鳥取短期大学の國本真吾先生や文部科学省の井口啓太郎さんをお呼びして学ぶことが出来ました。また、あゆみの実践についても報告をすることが出来ました。そして参加者と昼食をとりながら交流も深めることが出来ました。

○令和元年12月1日【東海北陸ブロック】

「障害者の学びの場づくりフォーラム in 東海・北陸」に於いて、分科会『行政と民間の絆』で集いの場あゆみの事例発表をしました。

○令和元年12月21日【四国・九州・沖縄ブロック】

「まるのつどい」に参加し、「共に考えよう！障害理解の促進、学びの場の担い手の育成、学びの場づくり」で分科会「地域施設・公民館における学びの支援」で集いの場あゆみの事例発表をしました。

○令和2年1月31日【近畿・中国ブロック】

「障害理解の促進、障害者の学びの場の担い手の育成、学びの場づくり」でポスターセッション「社会につなぐ学び」で実践を2枚のパネルにまとめ

て実践発表をしました。

○令和2年12月5日【中国・四国ブロック】

まるのつどい「危機を乗り越え共に考えよう障害理解の促進、障害者の生涯を通じた学びの場づくり」では、シンポジウム「障害者の生涯学習

～地域社会に根ざしたの担い手の育成とは～」で Zoom による話題提供者として発表しました。あゆみの紹介動画を初上映しました。

○令和3年2月14日

特定非営利活動法人エス・アイ・エヌ主催の

「障害者の生涯学習支援を地域で進めていくために」

Zoom による講演会と座談会を開催しました。

内容は「障害者の生涯学習を地域で広げるために」をテーマに、昨年度に続き、鳥取短期大学の國本真吾先生の講演でした。

また「障害者の余暇活動や文化・芸術活動を地域で広げるために」をテーマにした座談会も行いました。

座談会の参加者は次の通りです。

- ・文部科学省 総合教育政策局男女共同参画共生社会学習・安全課
- ・障害者学習支援推進室 鈴木孝志さん
- ・広島県立生涯学習センター 振興課長 松田愛子さん
- ・特定非営利活動法人ひゅーるぽん 代表 川口隆司さん
- ・広島紙芝居村 村長 阿部頼繁さん
- ・集いの場あゆみ 所長 草羽俊之（コーディネーター）

【助言者】鳥取短期大学 教授 國本真吾 先生

講演会及び座談会の内容は後日、動画で配信されました。

文部科学省の委託事業の受諾により3年の間に全国の様々な地域の取り組みや学習の機会に参加でき、障害者の生涯学習支援について改めて学ぶことが出来ました。そして、今後の取組への期待を感じると共に継続した取組の大切さを実感しています。

3. 「集いの場あゆみ」の3年間の取組から

生涯学習支援の実践の成果と今後の課題として考えられることを次のように考えました。

(1) 講座での学びを就労や生活に活かす

健康生活、食生活、障害者福祉、金銭管理等、学びの講座を通して学んだことを生活に活かしていくことが目的となります。個々の生活実態に沿って活かし方は様々です。障害福祉サービスの活用は生きるために必要な自立支援として活用します。またコロナ禍ではDrとの面談で伝えるためのツールとして健康手帳を役立てた人もいます。家計の状況を家計アプリで把握し、節約するために簡単レシピで学んだ弁当作りで昼食代が半分以下になった人もいます。

講座で学んだことを駆使して、生活に活かすことが出来て初めて学んだ意義

が全うします。障害者の生活に学びを活かすためには福祉サービスや支援との連動が大切となります。学びと支援を結びつけることが自律的な生活への始まりです。本人がサービス等利用計画に主体的に関わり、支援やサービスを活用して、自律した生活を営むことができるようになることを目指すことが課題となります。

（２）人との関係性を豊かに育む活動の場

ボランティアと利用者との交流を広げたり、講師と利用者の学びあいを深めたり、スタッフの様々な支援により信頼関係を築いています。また、異性との出会いは恋心を育む機会になったり、年齢差の違いも世代を超えて、頼りにしたり、頼りにされたりする新たな人間関係も築いています。あゆみには、自分の意志を伝えたり、他人の話を理解したりするコミュニケーションの苦手な利用者が多くいます。しかし、利用者にとってのあゆみは、「思いを伝えたい人がいる。」「話を聞きたい人がいる。」「温かく迎えてくれる場がある。」「見守ってくれる安心感がある。」ことが拠り所になっています。そして、そこで展開される活動が人との関係性を豊かに育んでいるのではないかと思います。

（３）人とのつながりを学んだコロナ禍の活動

集まって参加することがあゆみの日常だと思っていましたが、新型コロナウイルスの感染拡大により一変しました。リモートワークやオンライン授業などが言われる中で、あゆみでもライングループによる動画配信やライントークによる支援は、あゆみの利用者同士の交流やつながりを深める機会になりました。

また動画配信に協力をしてくれた講座講師やボランティアとの関係性もこれまで以上に近い存在となりました。言葉で表現が難しい人はスタンプで、他の人のコメントを参考にした書き込みや、仲間を気遣い励ますトークもありました。普段は言葉が少ない人もライントークだと積極的に書きこんでくることも分かりました。また、自分の関心ごとや趣味の紹介を動画や写真で配信する人もいました。グループラインでの動画配信やトークは今でも続けています。

しかし一方では、あゆみの仲間と会いたい、活動したいという思いはより高まっています。そのため、ライブ動画配信やグループビデオ通話による一体感をもった活用にもチャレンジしています。しかしながら集まる活動への思いの強さは益々高まっています。通信手段だけの活動だけでは、つながりを深めたり、広げたりするのに限界があるからです。コロナ対策をしながら活動を続けるための方策をさらに検討する必要があります。

そして、スマートホンの普及により障害のある人の利用も増えています。しかし、使い方によっては様々なトラブルに巻き込まれたり、料金の高額な請求になったりするケースもあります。使用者としての正しい使い方の知識やスキルを学ぶことも求められます。ラインでのつながりを今後どのように活かすか、通信手段として、より有効な展開にもっていくアイデア作りや学びの機会も求められていると思います。

(4) 生きがいづくりを通して自己肯定感を育む

当初は就労をしている人が休日に利用する場所として活動をしていました。しかし、最近は利用者の中に仕事をリタイアした人や、日中活動への参加が難しい人の利用が増えています。再就職のために、なかぼつセンター（就業・生活支援センター）や相談支援センターの支援を受けながら次の就労先を探す人もいます。また、人との関係を避けたり、社会参加する場所から遠ざかっていた人も参加するようになりました。

第2の人生への生きがい探しや次への就労先が見つかるまでの不安な日々を支える役割や、新しい就労先を決める時の決め手を探す支援にも及びます。これらの活動は、生きがいづくり、生きがい探し、自分探しにもなります。自信を育んだり、取り戻したりする活動にもなっています。つまり、自己肯定感を育む場としての役割と実践が求められていると思います。

(5) 生きる喜びを感じる活動内容の充実と質を高める取組の大切さ

あゆみの活動は土・日曜日の講座や行事を中心とした活動と平日は利用者の希望に沿って仲間との楽しむ活動を主にした、わが家食堂、外出、クラブ活動などが中心です。土・日と平日の活動は利用人数や活動日によって特徴的な取組を行っています。利用者の休日によって参加できる活動が限られてくるのが課題になっていました。しかし、平日にクラブ活動が始まったことで、平日の利用者にもアート、レクスポーツ、音楽の文化的な活動への参加を可能にしました。また、これらの活動には特別支援学校の退職した教員がボランティア講師として関わっています。専門的な支援が活動の質を高め幅も広がっています。

また、日曜日の行事も小グループ化を図り、親しい者同士で希望の場所に行く活動も始まりました。そして、活動の選択をするために勤務先での有休や希望休のとり方に変化が表れています。自分の参加したい活動日に計画的な有休や指定休をとる人も出てきました。休日を自分のために、必要な（やりたい）活動を選択し、親しい仲間と楽しむ活動を計画的に実行することもできるようになりました。つまり、自分の意思で主体的に参加する活動であることが喜びの源であると言えます。そのためには、活動の質を高めるための支援者の専門性や、その確保が課題となります。

(6) 生涯学習を支える基盤作り

① 支援者（ボランティア）や専門家など人材の確保

今年度は特別支援学校を退職した教員がボランティア講師としてクラブ活動などでの支援に関わっています。特別支援教育の教師経験とその専門性を生かした支援への期待をしています。一方、ボランティア講師として携わるには、学校卒業後の障害のある青年や成人者への接し方を学びながら、新たな関係性を築いてほしいと期待しています。学生ボランティアには、より利用者に近い立場で対等と共同の立場で関わる存在となることを期待しています。

②機関・団体等との協力関係の構築とネットワーク作り

公民館等での活動に参加したり、参加している団体との交流をしたりすることが大切となります。今年度はコロナ禍の中で限られていましたが公民館活動に積極的に参加している紙芝居グループとの交流や活動に参加しました。単独で参加するのはややハードルが高いところを感じますが、講座を通して共に活動している団体や講師と一緒に参加しやすい流れを作り、受け入れ環境を作ることが大切です。また、社会施設や福祉施設等で開催されるイベントや発表の機会にも無理ないところから参加する意味も感じています。

そのためにも公的な場所や機関との情報の共有や関係の構築も大切なネットワーク作りになると思います。

③学びを活かした社会資源の活用と支援連携や協力

当初、あゆみの利用者の8割の人は障害者福祉サービスや支援機関を利用していませんでした。しかし、現在は多くの利用者がサービスや機関の利用をしています。就労から生活の支援ニーズに直面した時にアプローチをしていく中で、就業・生活支援センター、基幹相談支援センター、相談支援事業所、移動支援、家事支援、訪問看護、大学病院の相談支援室（MSW）、グループホーム、就労継続支援A・B型事業所等、様々な支援機関や事業所との連携をとってケース会議や支援連携をとっています。今後も益々直面する課題に取り組むための社会資源の活用を学び、支援との連携の重要性が増していくことが予想されます。

④利用者の多様なニーズへの対応

現在の利用者の実態は年齢や障害の状況が多様になっています。また、家庭状況や生活状況等も様々な課題や問題を抱えるケースが多くなっています。支援者もそれぞれのケースによって必要な対応能力や支援技術が課題になります。また、障害特性の理解や福祉制度や知識も重要となっています。支援の質を高めるための研修やケース会での情報共有と共に問題解決をする力量も求められています。

* 以上の実践報告は【資料 1】も参考にして読んでください。

* 【資料 1】の次に「集いの場あゆみ」の活動の3年間をまとめた

『自立に役立つ学びと生きる喜びにつながる生涯学習』

を紹介します。